Kaito Kimura
機村械人
イラスト 兎塚エイジ
Illustration : Eiji Usatsuka
そのオーク、前世もヤクザにて
The yakuza called the ogre becomes the orc called the devil.
GA文庫

# Prologue ―― 『Ogre』→『Ork』

鬼瀬龍平の意識が覚醒した時、ヤクザであったはずの彼は自身が『豚』になっている事に気付いた。

そして彼の眼前で、一匹の『豚』が一匹の『子豚』を殴っていた。

■□■□■□

オーク収容所の食堂内に蔓延する暗く湿った空気に、一発の打撃音が風穴を開ける。

殴り飛ばされたオークは、まだ子供だ。その小さな体がゴム毬のように地面を跳ね転がり、巻き添えを食らった木製の椅子共々、仲良く倒れた。

「おいおいおい、すまねぇがもう一度言ってくれねぇか？　悪ぃな、切り落とされてからどうにも耳が遠くなっちまってよぉ」

土で汚れた体を震わせる子オークの前に、浅黒い肌の巨体を君臨させ、そのオークは半分先



を失った自身の左耳を指し示しながら言う。三つも四つも傷の刻まれた醜悪な顔のオークだ。

その後ろにも、負けず劣らずの屈強な肉付きのオークが二人控えている。

「多分、俺の聞き違いだよなぁ？　ごめんな～、思わず殴っちまって。そんな事言うはずねぇもんなぁ？」

巨体のオークは腰を曲げ、怯える子オークの前に顔を近付けた。

「俺に『賃金を渡せねぇ』、なんてなぁ」

「あ……あ……」

子オーク――『テム』は、手の中の小袋を握り締める。

オーク収容所では月に一回、刑務作業に従事する収容者に一応の給与が与えられ、日雑品購入日には好きなものが買える仕組みになっている。テムは、決して多くないその給料を外で生活している幼い弟達に渡すつもりで、監視官にも相談していた。

もともと、ここに入ったのも食うに困ってコソ泥を働いたためだった。

しかし、その給与を巻き上げようとする集団がいる。それが今、テムの目の前に立つ男――『ビグロ』の率いる一派だ。こういう場合、大抵は同じ班の奴が庇ったりするものだが、ビグロはこの収容所内の最大派閥の頭目。監視官にも金品を渡し通じている。今だって、監視官の目が光る食堂内で暴力を働いたにも拘らず注意がされない。担当官は手持ちの書類に目を落としていて、その出来事をたまたま見ていない事になっている。

「ごめん、なさい……でも、これは……」
テムが必死に拒否の言葉を紡ぎ出すと、ビグロの顔は一層の冷酷さに染まった。巨軀が立ち上がる。立ち上がるや否や、その足が、伏したままのテムの片腕を踏みつけた。
「ああッ、痛い！　やめて、折れる！　腕が折れる！」
悲鳴を上げるテムだが、勿論食堂内の他のオーク達は動かない。ビグロは、踏みつけたテムの前腕に、そのまま体重をかけていく。折る気だ。
「怪我をしたら働けなくなる！　それじゃあ、弟達が飢え死んじまう！」
「大丈夫だ。腕の一本や二本、すぐに治る」
嗚咽混じりの慟哭を上げるテムを真上から見下ろして、ビグロは薄汚れた声で言う。
「そうしたらまた稼げばいい。俺のためにな……その頃には、弟共もあの世だし安心して働けるだろっ!?」
最後の台詞を勢いよく叫ぶと、後ろの手下と一緒に下卑た笑い声を上げた。
ミシミシと音を立てるテムの腕。必死の助けを乞う言葉も、他のオーク達には届かない。ただ誰もが、嵐を前にした農夫のように、過ぎ去るのを待つだけだった。
ビグロの横に、一人の男が立っていた。
「……あ？」
ビグロの目線が、その男に向けられる。無論、オークである。他の収容者同様のボロボロの



衣服に包まれているのは、巨大と評しても決して肥満体ではない、堅剛な肉体。巨体のビグロと並び立つ長身。癖が強い黒髪を伸ばし放題伸ばし、無精ヒゲを蓄えた顎元。垂れた長い耳（左耳の先端は切り落とされているが）と白い肌が、北方出身を証明づける。
そんな一匹のオークが、ビグロの横に立ち、足元のテムを見下ろしていた。
「なんだ、てめぇは？　白っチョロい〝北の出〟の分際が、この俺に何か言いてぇ事でもあるのかよ」
「……」
「どうしたよ？　ビビって声が出なくなっちまったか？　なんなら、このガキと同じように腕へし折ってやるぜ。そしたら嫌でも――」
男の拳がビグロの顔面を撃ち抜いたのは、直後だった。

■□■□■□

『なぁ、鬼瀬龍平って知ってるか？』
『知らないわけねぇだろ。三条組若衆頭、背中に馬鹿でけぇ鬼の入れ墨背負った、〝三条の鬼〟。俺は直に見たことあるが……2m近い長身で、ガタイもかなりイカつかったぜ』
『強ぇんだよな』

『今更何言ってんだ、だから〝伝説のヤクザ〟なんだろ』
『拳銃や日本刀相手に素手で勝っちまうって噂、マジなのかよ』
『喧嘩が強いってだけじゃねぇ、度胸っつぅか、胆力っつぅか、漢気みてぇなもんが尋常じゃねぇンだよ』
『武装して殴り込みに来た敵対組に、真正面から立ち向かったって……』
『そのカチコミに、実際に参加した奴から聞いたんだがな……刃物持ってようが銃握ってようが関係なしに、正面から次々に叩き潰されたんだとよ』
『武装した十数人相手にか？』
『28人。全員病院送りだ。そいつも殴られて顎を真っ二つにされてたぜ。言ってたよ、人間相手にしてる気がしなかったってな……で、なんで今そんな話しだしたんだ？』
『ああ、さっき上から流れてきた話だが、その鬼瀬の組長の屋敷が襲撃されたんだとよ。相手は、十中八九、荒吐組だろう。三条組長は死んで、一人娘のお嬢は攫られたらしい』
『マジかよ……命知らずだな』
『ああ、鬼瀬が黙ってるはずがねぇ』
『荒吐組の奴ら、皆殺しだぜ』

■□■□■□



吹っ飛んだビグロの巨体が、幾つかのテーブルと椅子を薙ぎ倒し、甲高い音を撒き散らしながら乱転していく。やがて食堂の壁際まで到達すると、そのまま大の字になって停止した。ノビている。半豚の亜人――オークは、ただでさえ鼻が潰れているのだが、更に顔の中心に減り込んでしまっていた。
「てめぇ、何してんだァッ！」
直後、一瞬の静寂が支配した空間に怒号が轟いた。ビグロの後方に控えていた二人の手下が飛び掛かる。
対し、ビグロを殴り飛ばしたオークの動きは――静かで、端的で、爆発的だった。
まずは一方の手下が繰り出した拳を、右腕を振るって払い除ける。そして、除けたと同時に攻撃を叩き込んでいた。疾い。相手が、払われた――と思った時には、既に顔に一発、腹に一発見舞われた後だった。
続いて、崩れ落ちるそいつの向こうから、もう一人の手下が襲い来る。放たれたフック気味のパンチを半歩下がって躱すと、下げた足を前に戻しながら撃たれた右拳が綺麗に相手を吹き飛ばす。食らったこいつは、並んだテーブルの上をしばらく滑り、数人分の夕食……硬いパンと、塩で味付けしただけの不味いスープを台無しにした。
食堂内が沸き立つ。他の椅子に腰かけて様子を見ていたビグロの一派が立ち上がり、男を囲

い始めた。内数名は外へと飛び出す。更に仲間を呼ぶ気だろう。
「何やってんだ、『レイガス』の奴」
「正気か？」
「一体、どうしちまったんだ。いつもの大人しいあいつらしくもねぇ……」
この事態に、男と同じ、白い肌のオークの一団が小声で囁き合う。
「イカレてんのか、てめぇ」
野太くドスの利いた声で、輪の中心の男へと、一匹のオークが言った。
監視官は消えている。流石に、食堂から出て他の同僚を呼びに行った様子だ。
「お前、そのガキの何なんだ。何が気に食わねぇ」
呆然と、地面にへたり込んだままのテムが、ビクリと肩を揺らす。
「……何も関係ねぇ」
そんなテムを一瞥し、自身の身を包む衣服の胸元を引き裂き動き易くしながら、男は……。
レイガスは、獣の唸り声のような低い声で言った。
「俺がお前等にしてるのは、ただの憂さ晴らしだ」

■□■□■□



——俺は何なんだ。
先刻から、レイガスの脳裏に浮かぶのは、そんな言葉ばかりだった。
——ここはどこだ。
——俺は何をやっているんだ。
次々に湧き上がる疑問と判然としない自我。けれど、体の奥底から噴き出す憤りにも似た感情に任せ、レイガスは動く。壁にかけてあったカンテラを振り回してきたオークの攻撃を躱し、その面に拳を打ち込んだ。
「……」
記憶、自意識、知能。思考をすれば、すぐに出てくる情報を元に現状を理解しようとする。
ここは、収容所。犯罪者や乱暴者、ともかく外の世界では放っておけないならず者を閉じ込めておく、刑務所のような場所だ。この肌の浅黒い、豚と人間を混ぜ合わせたような生き物はオークという。自分も、それの仲間だろう。
それは、何とかわかる。
だが、レイガスの知りたい事は……思い出したい事は、それではない。
——俺はどこにいた。
——どこで、何をして、どうして今、こうなっている。
「レイガスゥッ！」

一人のオークが、彼の名を叫びながら作業用の棍棒を振りかぶってくる。それに対し、レイガスは眉間を歪めた。

――違う。俺の名は鬼瀬龍平。

――組長からもらった、ただ一つの名前だ。

その苛立ちを乗せた拳が、眼前のオークを吹っ飛ばす。手放された棍棒が天井にぶつかった。ここはもう食堂内ではない。既に外の廊下……そこに、ぶちのめされた幾人ものオーク達が転がっている。

レイガスは、突き出した自身の拳を見る。

――この体は何だ。前に比べて、間合いや歩幅に少し違和感を覚えるが……。

――……だが、筋力が落ちた気配はない。

口汚い言葉を喚き散らしながら飛びかかってきたオークをまた一体、地面に叩き付けるように殴打する。悲鳴と共に、唾液と血と歯が吐き出された。

軽く振っただけで、これだ。まるで、鉄パイプに番線を何重にも巻きつけたような腕。筋肉の構造そのものが、人間とは違うようだ。

「……」

――……違う、そうじゃない。今考えるべきは、そうじゃない。

――俺は、何をしてた――。



「調子に乗ってんじゃねぇぞッ！」

また一人……先ほどから同じ光景の繰り返しだ。拳を振り上げ、レイガスへと真っ向から襲い来る半豚の亜人。

その瞬間、レイガスの脳裏にフラッシュバックが起こる。

『鬼瀬エッ！　荒吐組舐めんじゃねエッ！』

鬼瀬の剛腕が、刀を持った凶悪な面の男を殴り伏せる。床に落ちる刀。蹲って唸るそいつを、鬼瀬は掴み上げる。

『……てめぇがオヤジを殺ったのか』

――俺は……。

『お嬢はどこだ』

――俺は、何をやってるんだ。

そこで、背後から、鬼瀬の脇腹を熱い痛みが貫いた。

「……」

映像が戻る。視覚が、〝今〟を映写する。

視線を落とせば、レイガスの脇腹に背後から、一人の小柄なオークが手にしたナイフを突き立てていた。傷口から溢れる血が、ボロキレのような服を染めていく。

「へ、へへ……図に乗ってっから――」

「それで殺したつもりか？」
引きつった笑みを湛えるそのオークに対し、レイガスは変わらぬ声音のまま告げた。
「へ？」
「刺したら捻って傷口を広げろ、相手が死ぬまでな」
言うや否や、レイガスの振るった裏拳が、オークの顔面を捉え、壁に激突を果たさせる。差し込まれた刃をそのままに、レイガスは進行を再開した。歩くと言っても、目的地などない。何がしたくて戦っているのかもわからない。ただ、本能のままにそうしている。
戦うのが、本能。では、何のために。何で、戦っている。
――過去は、いつまでもへばりついてくる……。
――……過去？　何故、過去の事を――。
その時、再びフラッシュバックした記憶の断片が、レイガスに……鬼瀬龍平に、『その過去』を思い出させた。
『鬼瀬さん……すい、ません……お嬢さんを、荒吐組の奴等に……』
――そうだ、思い出した。俺は。
『りゅー……へー……――』
――俺は。
――〝なにも守れなかった〟。



気がつけば、大きな扉の前にいた。木製の扉。閂は抜かれている。
『お嬢っ……』
押すと、風が吹きこんできた。湿った空気が停滞していない。外だ。
『お嬢ッ！』
レイガスは、外へと出る。
薄闇の中で幾つもの松明が光を作り、武装した何十もの兵士達がレイガスの前に立ちはだかっていた。
「……――――」
レイガスの動きが止まる。思考が止まる。視線が止まる。
立ち並ぶ、多種多様な鎧や防具、そして武器を纏った者達の先頭――レイガスの真ん前に立つ存在が、彼からあらゆる権利を奪った。
女である。雪のように白い肌の、背の高い女だ。
松明の光に照らされ、その長い金色の髪が絹糸の如く七色に輝いている。まるで芸術品のように滑らかな曲線美を描き組まれた腕と、伸びる脚。身につけているのは軽量型の鎧だが、その上からでも豊満な胸の存在がわかる。

何よりも目を引くのは、その両目だ。右目は蒼(あお)く、左目は黄色。まるで、蒼穹玉(サファイア)と黄明玉(トパーズ)のように輝く凛然(りんぜん)と構えられた双眸(そうぼう)。
艶(あで)やかで、美しく、しかし気高い、そんな女と目が合った。
「……」
ゆえに、レイガスの意識は止まる。
彼の脳裏には今、また前世の光景が到来していた。
白熱する記憶の中、明滅する映像の中、笑みを湛え自身を見上げてくるセーラー服姿の少女が、その女に重なって見えた。
思わず、呟(つぶや)く。
「……お嬢」
「捕縛ッ！」
女の口が銃声のような声を放った直後、レイガスの体を衝撃が襲った。
一瞬、彼には自身の身に何が起こったのかわからなかっただろう。狙撃されたような、何か巨大な掌に叩き伏せられたような、そんな感覚だった。気がつけば、地面に倒れていた。
レイガスが視線を自分の胴体に向けると、体を腕ごと拘束するようにいくつもの光の縄のようなものが巻きついているのがわかる。青白い光子を火の子の如くチラつかせながら形成されたその光輪は、巨大な手錠の枷(かせ)のようにも見えた。



「魔術師3人分の《魔縄(まじょう)》で捉えさせてもらった。無駄な抵抗はするな」
レイガスの眼前に、脚が現れた。見上げれば、あの黄金(こがね)色の髪の女だった。
まるで生ゴミにたかる害虫を見るような冷酷な目で、女はレイガスを見下ろしている。
「随分、囚人の分際で好き勝手をしたようだな。思う存分楽しんだか？」
瞬間、その足が、レイガスの頭部を踏みつけた。
「喜べ。殺処分だ、この豚が」

# Page.1 ―― girls knights

「以上が、収容所内監視官からの報告及び、現場に居合わせた収容者達の証言を元にした経緯の全てです」

領主宮の大会議室内に、芯の強い女の美声が響き渡った。

大都内の騎士団長達が集った長机を前に、そう告げたのは、雪色の肌の女である。突如、美術彫刻に魂が宿り、人々を魅了するために動き出したのか、とも思えるような整った顔立ちと体型。身に纏っているのは最低限要所を防御しただけの軽量型の鎧で、隠しきれていない豊かな胸元が露わとなっている。耳は人間のそれよりも少しだけツンと上向きに長く、その上辺りの流麗な髪の一房が、鳥の羽のように跳ねている。

いわゆるエルフ族――その中でも戦闘能力に秀でた希少種族、〝スカイ・エルフ〟に分類される女だ。

彼女は、居並ぶ騎士団長達から視線を外し、自身の真横に膝を付いたオーク……此度の騒動の主犯と思われる囚人を睥睨する。



収容所前にて捕縛されたレイガスは今、光の輪から金属製の拘束具で身を絞められ、手枷を嵌められた状態で跪いていた。

「つまり、収容者同士のイザコザから乱闘に発展した……と」

事の成り行きを説明された、騎士団長の一人がそう言った。収容所にあったような安物の木製とは違う、金属製で装飾の施された椅子に腰かけ、その年季の入った顔の騎士団長は嘆息する。

「被告人、レイガス。彼女の報告内容に関し異論はあるかね？」

そう問うたのは、レイガスから見て長机の端の正に反対側に座した、白髪混じりの髪を撫で付けた壮年の男だった。その顔付きからは、なよっとした印象さえ受ける。気の弱そうな、人の良さそうな感じではあるが、身につけた豪奢な衣装に助けられなんとか品位は底上げされている。

この大都の主、『ケリオット・アルバル』領主その人だ。

彼は都の法に則り、犯罪者を裁く審問会の長として、レイガスへと反論を促した。

しかし、レイガスは――。

「無い」

地響きのように低くくぐもった声で、そう答えた。無精に伸ばされた黒髪の奥で、双眸は瞑られている。

「あの収容所でぶっ倒れてる奴等に関しては、全員俺が叩きのめした。理由も、むしゃくしゃしてやっただけだ」

沈黙が会議室内に訪れる。女騎士団長の「ふんっ」という、蔑むような声だけが鮮明に響いた。

「……一つ、言わせて欲しい事がある」

一拍間を置いて、レイガスは再び口を開いた。俯いていた顔を上げ、その目がケリオット領主へと向けられる。

「収容所内で、ガキが虐められていた。監視官は、それを見て見ぬふりだった」

瞬間、それに対し領主が何かを言うより早く、レイガスの横っ面を閃撃が弾いた。女騎士団長が、手にした剣の鞘を振るった結果だ。

「何を言い出すかと思えば、我々に対する侮辱か？」

鋭い目線を向けたレイガスの瞳に、怒りの表情の彼女が映る。

「あの収容所は、領主親衛《白豹の騎士団》によって警守がされている。そのような事が――」

「いや、『ヴィオラ』嬢。少し待ってくれ」

ヴィオラ――と呼ばれた女騎士団長の言葉が、そこで止まった。彼女が振り返った視線の先、領主の真横に座っていた騎士団長の一人が、椅子から腰を上げる。



他の騎士団長達同様に防具を装備しているため体格は変わらないが、その顔はいわゆる〝甘いマスク〟という部類に属するだろう。整えられた金髪も手伝って、相当な男前だ。腰に下げた、その一振りで城が一つ建つのではと思わせる程美しい剣や、荘厳な鎧も手伝って、高貴な居住まいを醸している。まるでお伽噺に出てくる聖騎士がそのまま表現されたかのような存在だった。明らかに、他の騎士団長達とも一線を画している。

「『ヴァンリミス』殿」

ヴィオラが、その名を呼ぶ。

ヴァンリミスは、彼の後方に控えている、収容所の運営を管理している準騎士団長に「早急に調査をしてくれ」と口早に告げると、視線をヴィオラに……そして、レイガスへと移す。

「確かに、彼が起こした事は大事だ。だが、何も処刑や重刑に処するほどのものではないと思われる」

その発言に、ヴィオラはキッと眼光を尖らせ反論する。

「しかし、現場からは59名にも上る負傷者が報告されています。収容所内の損壊も夥しく――」

「だが、死者は出ていない」

ヴァンリミスが言うと、ヴィオラは言葉を止めた。凶暴なオークが収容所内や都内で騒動を起こす案件は、死者の出る可能性が極めて高い。正直、今回ほどの規模のケースで死者が出な

かったのは珍しいくらいだ。
「レイガス」
ヴァンリミスが、レイガスへと問う。
「君は先ほど、むしゃくしゃしてやったと言ったが、本当は、その虐げられていた少年のオークを見兼ねて手を出してしまったんじゃないのか？」
彼の発言が、他の騎士団長達にざわつきを起こす。ヴィオラは「そんなわけが……」と呟きながらも、その目をレイガスへと向ける。
「情状酌量の余地もあるが、あの収容所に戻せばまたイザコザが生まれるかもしれない。現時点でも、相当数の収容者から恨みを買ってしまった状態だ……さて、如何いたしましょう、領主」
「あ、ああ……」
ヴァンリミスから不意に結論を迫られ、呆けていたケリオット領主は「うーん……」と唸る。収容所に返すのは危険。だが収容者を容易く無罪放免などできない。では、どのような処置を下すか……。
「そうだ」
そこで、領主はパっと顔を持ち上げると、ヴィオラを見遣る。
「ヴィオラ。確か、お前の《天翼の騎士団》は人手不足だと聞いているぞ」



「……え？　……はい、それは」
水を向けられたヴィオラが困惑しながらも返すと、領主は笑みを湛えて言った。
「このオークを、お前の騎士団の雑用に使うというのはどうだろう？」
「……は？」
ニコニコと能天気な笑顔のケリオット領主に、ヴィオラは表情筋を引き攣らせた。

■□■□■□

「領主様は真面目にお考えなのか！　事もあろうに、我が《天翼の騎士団》……〝女〟騎士団に！　オークの下働きを迎え入れるなど！」
「……」
憤慨を露わに歩き進むヴィオラの後ろに、拘束具と手枷で捕縛された状態のままのレイガスが続く。
この大都アルバストラには、近衛騎士団の駐屯所を併設した領主宮から城下町に続く、だだっ広い道がある。両脇に商店が立ち並び、パレードでも行えそうな幅広の大通り。現在二人は領主宮を後にし、この道を進みながら、ヴィオラの統率する《天翼の騎士団》の駐屯所へと向かっている途中だった。

「他の騎士団長達も異論ひとつ示さない！　何が『タダで男手が手に入って良かったな』だ！領主様がああ言ってしまえば、みな聞くしかないではないか！」
「……だが、議論の流れを作ったのは、あの男みてぇに思えたが……」
肩を大きく揺らし、ふんふんと息を荒らげているヴィオラに、レイガスは呟くようにそう言った。返答は期待していないただの一人言のつもりだったが、それに対しヴィオラは振り返る。ただし、その顔は怜悧な眼光を携え訝しげなものだった。
そして冷たい声で言う。
「当然だ。《虹玉騎士》たるヴァンリミス殿は別格。領主様とて、あの方の意見を無視することはできまい」
七年前、当時《呪われた都》と呼ばれていたこの地に数名の魔術師を従え赴任。そして、都の乗っ取りを計画していた呪術師集団を殲滅し、瞬く間にこのアルバストラを発展させた立役者。それがあの方だ――と、ヴィオラは言う。
「その手腕と功績を讃えられ、アルバル王より国に七名しかいない《虹玉騎士》の一席、《白豹騎士》の称号と《聖宝》を授かった。この『凱旋道』も、ヴァンリミス殿率いる騎士団が、悪しき呪術師団を打倒し領主宮へと帰還を果たした際に通った道として、その所業を記念し名付けられているのだ」
そこで、ヴィオラはフッと笑みを浮かべる。蔑みや卑しみの入り混じった、冷笑だった。



「お前が今こうしていられるのも、ヴァンリミス殿の〝慈愛に満ちた解釈〟によるものだ、くれぐれも感謝しろ」
「……」
「だが、勘違いはするなオーク」
冷酷な笑みが、そのまま冷酷な無表情へと変わる。
「先に言っておく。私はお前達オークを嫌悪している。特にお前のような、知性の欠片もない粗暴で凶悪なロクデナシなど、許されるならば、この場で斬り殺してしまいたいくらいだ」
ヴィオラが、腰に下げた剣の柄に触れた。憎悪じみた気配がありありと見える。行き交う行商の馬車や買い物客達も、この二人の周辺を本能で悟って避けて通るほどだった。
「自由になったなどと決して思うな。私は貴様を、蔑み、見下し、差別する。少しでも舐めた態度を取れば、収容所に戻された方がマシだったと思う事になるぞ」
それだけ言ってヴィオラは体勢を前へと戻すと、進行を再開した。レイガスは小さく嘆息を漏らし、その後に黙って続く。

■□■□■□

凱旋道を抜けると、一旦商店の流れは途絶え、活気も薄れてくる。しかし、しばらくすると

また賑やかな街並みが見えてきた。それは、騎士駐屯所が近付いている証拠だ。

国が認めた、国を護る戦士――それが騎士だ。元から貴族出身の者も多く、稼ぎの良い上流職種である。騎士団の駐屯所を中心に商店街は発展しやすい。ヴィオラの束ねる《天翼の騎士団》の駐屯所周辺にも商人通りがある。商家が店を構え、また、行商人が露店を開いている通りだ。ざっと見ただけでも、酒場や食堂を始め、仕立屋や武器屋、果てには宝石店なんてものもあるのは、やはり《天翼の騎士団》が〝女騎士団〟である事からだろう。他の商人通りにありがちな、娼婦館が無いのもそのためだ。

「少し寄り道をするぞ。ついて来い」

ヴィオラはレイガスを連れたまま、その立ち並ぶ商店の内の一つに入った。

衣服や防具、剣や斧、置物や時計に装飾品、玩具にガラス細工……統一性が無い。骨董屋だろうか？　いや、〝なんでも屋〟の方が正しいか。もしくは、質屋か。店の品揃えを見て、レイガスは思った。

はたきを振っていた、禿げ上がった髭面の店主と思われる小男が、「いらっしゃい……」と気の抜けた挨拶をしながら振り返る。そして、客の顔を見るや否や「おお！　ヴィオラさん！」と一瞬で元気になった。

「待ってやしたよ！　例の注文の品、良いのが入りましてね」

「そうか、いつもながら世話になるな」



そう言って、ヴィオラは先程レイガスに見せていたような非情なものではなく、温かみのある、それこそ美の女神が湛えるような微笑みを浮かべた。

それに対し店主は「いえいえ、世話になってるのはこちらの方で……」などと言いながら、チラリと、ヴィオラのたわわな胸元に視線を流した。

「ん？　私の胸がどうかしたのか？」

「あ、いえ！　こっちの話ですんで！」

「そうか。それと、今日はもう一つ早急に用意して欲しいものがあってな……」

店主と何やら相談を始めたヴィオラの一方で、レイガスは適当に商品を眺めていた。商品の箱や包装紙の表面には、多様な言語が用いられている。もしかしたら、客から注文を聞き、その品を他店や他都、更には異国の輸入物からも探し出す〝取り寄せ屋〟と言ったところなのかもしれない。

そこで、レイガスの目が思いがけないものを発見した。薄汚れた、手の平サイズの長方形の紙箱と、その上から覗く円柱状の草束は……間違いない。

〝タバコ〟だ。

ザザッ――と、脳裏にノイズが走った。

一呼吸の度に口の中を満たしていく、あの香ばしい匂いと味が、鮮明に浮かび上がる。ふと、

すぐ近くに立つ少女の存在に気付き、慌てて火を消した。
『ああ、別にいいわよ。気にしないで。お父さんだって他の組連中だって吸ってるんだし』
鴉の濡羽のように艶やかな黒く長い髪の、セーラー服を着た少女。
『それにあたし、タバコのにおいって結構好きなのよね』

「……」
「おい！　勝手に商品に触るんじゃねぇ！」
瞬間、轟いた店主の怒声に、レイガスの意識が戻る。気付くと、手枷の嵌められた手の中に、タバコの小箱が収まっていた。思わず、手に取ってしまっていたようだ。
「オークが触ったものなんざ売り物にならねぇぞ！」
はたきの先端を向けて怒鳴る店主。その隣で、ヴィオラがキッとレイガスを睨みつける。
「勝手な事をするなと言ったはずだ」
「……面目ねぇ」
「すまない、主人。あれは私が買い取ろう」
「いや、ヴィオラさん、何もそこまで……しかし、どうしたんでやすか？　あの切り落とされた耳……収容者でしょう？」
「……少し、事情があってな」



依然、殺気じみた視線を向けるヴィオラに対し、レイガスは手にしたタバコの箱を見つめ続けていた。

■□■□■□

「悪かったな」
そう言って、レイガスは手中のタバコの箱を差し出す。
「……そんな何の用途に使うのかもわからないもの、私だって必要ない」
対しヴィオラは素っ気なく答えると、レイガスを無視して歩きだした。レイガスは小さく嘆息すると、とりあえずタバコを手に持ったまま彼女に続く。
店での要件を終えた二人は、そのまま商人通りを歩き進む。やがて辿り着いたのは、一際大きい石造りの建築物だった。砦と呼ぶには大袈裟だが、見た目から堅牢だという事はわかる。各所に掲げられた旗には、青地の布に白の刺繍で羽の紋章が描かれている。
ここがヴィオラの率いる《天翼の騎士団》――その駐屯所だ。
「おかえりなさい、団長！」
門を潜り建物の中に入れば、団員と思われる者達が皆、ヴィオラへと出迎えの挨拶に来る。団員だけではなく、おそらく使用人と思われる者達も。当然だが、全員が種族こそ様々だが女

性だ。

そして全員は、ヴィオラがオークを連れている事に驚きの顔をする。

「心配するな。すぐに外に連れていく。子供達を近付かせないように注意しておいてくれ」

レイガスへと、奇異だったり侮蔑だったりの目を向けてくる女達へ、ヴィオラは端的に告げていく。〝子供達〟……という言葉に、一瞬レイガスはひっかかるが、そんな彼の疑問など無視し、ヴィオラは「さっさとしろ」とレイガスを一階の奥へと連れていった。

着いた先は、物置だった。

「まず着替えろ」

そう言って、ヴィオラは手にした袋を突きだしてきた。枷と拘束具を外されたレイガスは、その袋を受け取り、中を見る。簡素な服が一式入っている。

「先ほどの店で買った服だ。お前の大柄な体格に見合うのはそれしかなかったのでな。流石に、いつまでもそんなものを着られていても目障りだ」

レイガスは、あの収容所内から着替えていない。なので当然、その服は収容者服のままだ。薄汚れた布地に、背中側には刺された際にできた血の痕もついている。ちなみに、刺傷に関しては捕縛後に縫って塞がれている。麻酔無しでの処置だったが、唸り声一つ上げないレイガスを医師は気味悪がっていた。

「……」



ヴィオラが退出し、一人残された物置の中でレイガスは着替えながら思考する。何がどうしてこうなってしまったのかはわからないが、自分には〝前世の記憶〟というものがあるようだ。いや、今この時で言うなら、その前世の人格が主であり、このオークの体としての記憶こそ曖昧だ。あの収容所内で前世の記憶が蘇る前まで、自分がどういうオークだったのかもわからない。だからと言っても、前世の記憶のすべてが想起されたわけでもない。

この身は、鬼瀬龍平としても、レイガスとしても中途半端だ。

だが、とりあえず今は、レイガスというオークとして、この世界で生きていくしかないのだろう。

思いながら、着替えを終えたレイガスは扉を開けて廊下へと出る。

扉を開けた目の前に、〝魔女〟が立っていた。

思わず動きが止まる。その〝魔女〟は本当に目前に立っていたからだ。いきなり〝魔女〟などと一方的な表現をしたが、そうとしか言いようがない。その表現がよく似合う。黒い三角帽を被り、着ているのは普通の衣服だが、黒いローブを纏っている。

「やあ、こんにちは豚さん」

黒髪は床につくほど長く、前髪で目元が見えない。顔の中で唯一見える口が動き、レイガスへと言った。見た目に反し、幼い少女のような声で。

「ようこそ。君が来るのを待ってたよ」

「……なに？」
〝魔女〟の言葉に訝るレイガス。そこで。
「また黒魔術で知ったのか？」
物置の前で向き合ったままの二人の元へ、ヴィオラがやって来た。
「占星術と言ってよ、団長。あれ？　彼どっかに連れてくの？」
「収容所で暴れ、追い出された粗暴者だ。ここに置いておくわけにはいかない」
「ふぅん、君、暴れるのが好きなのかい？」
自身の顔の前に人差し指を持ち上げ、〝魔女〟は笑みを浮かべる。
「そんなに暴れるのが好きなら、永遠に戦い続けられる呪いをかけてあげようか？　傷も苦痛も忘れて、その体が一欠けらの肉塊になるまで死にたいと思っても死ねない、そんな呪い」
「『イーヴィ』」
流石に苦い顔をするヴィオラに、イーヴィと呼ばれた〝魔女〟は「冗談だよ」と口だけで笑った。
「どうせ〝野営地〟に行くんだろ？　ボクも付いていっていい？」

■□■□■□

大都アルバストラは山の麓に築かれた都だ。
山と反対側の方角に牧草地のような草原が広がり、その草原を抜けた先には長い森が続いている。
そして《天翼の騎士団》は、その都と森の中間地点である小高い丘の上に、現在陣を張っていた。なんでも、駐屯所の第二支部を建設中なのだという。
「……何故、街の外れなんだ？」
都を出て、草の生い茂った斜面を歩き進みながら、レイガスは背後の街並みを眺めつつ先導するヴィオラに問う。
「うるさい。黙って歩け」
ヴィオラは冷徹に答え、レイガスの手首に巻かれた手綱を引っ張った。
「ボク達《天翼の騎士団》は、市井警備が主な任務なのさ」
ヴィオラの代わりに質問に答えたのは、後続のイーヴィだった。手に持った木の枝を杖のようにくるくると回しながら言う。
「丘の上からなら、ひろく都内が見渡せるでしょ？　外部からの危険に対応しつつ、外層民区の様子を窺い、事件が起こればすぐに駆けつけられる。市民の安全を何より願う、心優しき団長様の発案さ」
「お前もうるさいぞ、イーヴィ」



そんな事を言っている間に、丘の上へと到着した。
〝野営地〟と呼ぶだけあって、その光景は正にキャンプ場だった。森の手前に広がる、広大な丘陵。そこに張られたいくつものテント。そのテント群の真ん中に立つ木造の骨組みは、建設中の第二駐屯所なのだろう。そして、まばらだが、何人かこの場にいる団員達の姿も見当たった。
材木を肩に担いで運ぶ、ドレッドヘアの上に手ぬぐいを巻いた、サバサバした雰囲気の浅黒い女。
刺繍の施された白いフードをかぶり、寝そべりながら本を読んでいる、眼鏡をかけた女。
大きな岩を背中に背負ってスクワットをしている、日焼けた肌に健康的な体つきの、見るからに女戦士といった風な女。
腰あたりからスリットの入った風変わりなデザインのドレスを着て、手にしたパンのようなものを食している、目元に大きなクマのある女。
種族や外見の差異はあれど、当然、全員女だ。
更に言えば、はしゃぎながら草原を走り回っている子供もいる。見た目の全く同じ、双子だ。この双子も女児である。
三人は野営地の中を進んでいく。ここでも団員達の反応は大差ない。まずヴィオラを発見し近づいてきて、その後レイガスを認識し驚くか眉を顰める。そしてヴィオラから「後で説明す

る」と言われ、その場を去っていく。
「気分を害したか？」
レイガスを振り返って、ヴィオラが冷笑を浮かべる。
「オークに生まれた自分を恨むんだな」
「……」
「『タウ』！」
野営地の真ん中辺りに辿り着いたところで、ヴィオラが声をあげた。
「はいは～い、お帰りなさいヴィオラちゃーん」
と、妙に間延びした声と共に、また新たな団員がやって来た。
淑女、という単語の似合いそうな女性である。髪は一つに束ねた三つ編みで、細い垂れ目と浮かべた三分咲きの微笑みがおっとりとした雰囲気を醸す。ただし、駆け足に連動しゆさゆさと揺れる牛のような爆乳がアンマッチな迫力を生み出していた。
「こいつに、何か雑用をさせたい。何かないか？」
「あらあら」
タウは、頬に手を当てながら驚いたようにレイガスを見上げる。
「私はタウ、お名前は？」
「……レイガスだ」



一瞬だけチラリとヴィオラを確認し、レイガスは名乗る。
「レイガスさん、よろしくね」
レイガスの縛られたままの手を両手で取って、タウは柔らかく笑う。
「タウ、言っておくがこいつは収容所上がりだ。気を許すな」
ヴィオラはレイガスの手綱を解きながら、タウへと言う。タウはレイガスを見上げて、困ったように笑った。
「私は他の仕事ですぐに領主宮に戻らねばならない。この男の管理はお前に任せる」
「うーん、そうねぇ～……あ、『トラッタ』ちゃーん」
そこで、タウは近くを通りかかった、あの材木を運んでいた浅黒い肌の女に声をかけた。ドレッドヘアに、すらっと伸びた美脚を惜しげもなく露わにしている。臀部の少し上あたりからホットパンツにかかるように出た、箒のような尻尾を見ればわかるように、半馬の亜人である。
「トラッタちゃん、建設のお手伝いは必要？」
「今日は構図を引きなおす予定だから、人手はいらないよ」
蓮っ葉な言い草で、トラッタはそれだけ言うと去って行った。他の団員達も、遠目に厭な目を向けている。双子の子供も、少し離れたテントの陰からジッとこちらを見ている。毛嫌いしているのが丸わかりだ。
困ったように小首を傾げるタウ。イーヴィはいつの間にかいなくなっている。ヴィオラは嘆

息を漏らし、言った。
「しかたない、『サビ』につけさせるか」

■□■□■□

「サビ、人手を連れてきたぞ！」
各個人の私室用テント群から少し移動した場所だった。
ヴィオラが呼んだ先に、巨大な洗濯物の塊が歩いていた。いや正しくは、洗濯物を山ほど抱えた誰かである。
「あ、あ、ヴィオ、ラ、さ、あわわ」
洗濯物の向こうから声が聞こえた。キーの高い、幼く可愛らしい声だが、慌てふためいて言葉をなしていない。
「あ、だめ、あ、ああっ！」
一段と甲高い悲鳴が上がると、洗濯物の山が傾いて地面にぶちまけられた。その光景を前に、ヴィオラは溜息をつき、タウは困ったように笑む。
「大丈夫か、サビ」
「ふ、ふぇぇ、ごめんなさい、ヴィオラさ、はわっ！」



慌てて立ち上がり、駆け寄ろうとしたその少女は、放置されていた水桶に蹴っ躓いて盛大にひっくり返った。ヴィオラは、自らの顔を手で覆う。
レイガス達の前に、桶の中の水を引っ被った少女がへたり込んでいる。栗色の長い髪に、幼さの残る顔立ち。動きやすさを優先した地味な服。それらすべてが水浸しになり、大きな眼には涙を浮かべている。更に、その少女の手の甲や頬から首筋にかけてには、エメラルド色の鱗が見られる。水を弾き輝くそれは、半蛇の亜人の証である。
「お前には、サビの仕事を代わりに行ってもらう」
ヴィオラは、レイガスへと言う。ここにきて初めてレイガスの存在に気付いたのだろう、サビが「ふえっ」と悲鳴を上げた。
「……」
レイガスは視線を巡らせる。視界の中には、山積みの洗濯物、散らかった建築道具や武器や防具に、木箱や樽、それに、誰のものかもわからない私物が転がっている。調理に使う大釜や炉もあるが、どれもこれも手入れがされず粗雑に放置されている様子だ。
「掃除、洗濯、それと団員全員分の夕餉の支度だ」
ヴィオラはサビを引っ張って立ち上がらせながら言う。
「サビ、お前は今日は何もしなくていい。こいつに命令だけ出しておくんだ」
「えっ」

突然のヴィオラの発言に、サビは驚いたような困惑したような顔をする。
「え、え、でも、まだ昨日のお仕事も終わって……」
「最近、疲れがたまっているだろう。少し休息を挟め」
そう言って、微笑むヴィオラ。しかしレイガスが視線を傾けると、その顔に一転して冷たい笑みを浮かべる。
「『こんな奴隷のような事ができるか！』……とでも言いたそうな顔だな。残念だが、私はお前を奴隷としか思っていない。ゆえに、辛辣に扱うことに何一つ心が痛まない」
そして、顔を無表情に戻す。
「今日の夕方、私が戻るまでに終わらせておけ。完了していない場合はお前の責任とする。夕飯と寝床は無いものと思え」
それと……と、タウを見て。
「くれぐれも逃げ出そうなどと思うな。お前の事は、タウに監視をさせておく。《国定魔術師》のタウの前では、お前など敵ではない」
「……」
「本性を出して暴れるか？　それもいいだろう。ただし、ここが《天翼の騎士団》のど真ん中であることを忘れるな」
「ちょっとちょっと！　ヴィオラちゃん！」



立ち去るヴィオラの後を、慌ててタウが追いかける。
「あ、サビちゃんはちょっとおっちょこちょいでドジっ子だけど、仲良くしてあげてね～」
一度だけ振り返ってそう言って、何やら言い争いながらタウとヴィオラは行ってしまった。
「ヴィ、ヴィオラさぁん、タウさぁん……」
サビは、その後ろ姿に救いを求めるように伸ばしていた手を、はたりと落とした。そして、自身の姿をすっぽりと覆うように落とされた影を見て、背後に立つ存在を今更のように実感する。
「あ、あ、あ、……」
恐る恐る振り返り、見上げると、そこに立つのは、無言のレイガス。
逆光のため真っ黒に染まった巨大なシルエットの中に、切れ味鋭い肉切り包丁のような眼光だけが煌々と輝いている。魔獣にしか見えない。
「あ、ああ、あああ、あああぅひぃ、ひぃぅぅぅ……」
サビは目を回して悲鳴を漏らしガタガタと震える。恐怖のあまり失禁していてもおかしくないような反応だった。
「……ふぅ」
そんな彼女を前に、レイガスは小さく息を吐き。
「……で、まずは何をすればいい」

■□■□■□

……――――そして時は過ぎ去り、夕刻。

「こんばんは、ヴィオラさん。今日もお仕事、お疲れ様」

領主宮での仕事を終え市街地を進むヴィオラは、馴染(なじ)みの市民達からかけられる温かい声に笑顔を向ける。

しかし、そんな表情とは裏腹に、彼女の頭の中にあるのは野営地に置いてきたレイガスの事だ。

断言できるが、まず確実にレイガスは仕事を完遂できていないだろう。

あの野営地に居る団員達十数名が数日をかけて出した洗濯物の山に、片付ける余裕も無く放置されたままの物の数々。それらすべてを整理整頓した上で、全員分の食事の準備だ。大の大人でも五、六人居なければ無理だろう。

しかも、レイガスの指示役につけたサビは、非常に我(が)が弱い。野営地はまだ建設途中という事もあって、作業が詰まっている。メンバー全員がそれぞれの仕事に追われており、給仕担当のサビ一人では家政を回せていないのが実情だ。以前、民間から何人か下働きを雇った事もあったが、サビは遠慮して彼女達に声をかける事もできずに終わってしまった。



正直、無理難題だ。だが、わかっていてそうした部分もある。

不条理な待遇を投げかけられれば、すぐに不満が爆発し暴れ出す。短気で気性の荒いオークならそうなるはずだ。そうすれば、レイガスの処遇再考の言い訳も立つ。と、考えての事だったが、その件をタウからは「大人気(おとなげ)ない」と叱責(しっせき)されてしまった。

（……確かに、大人気ないやり口ではあったかもしれない……）

だが、この《天翼の騎士団》にオークを迎え入れるなど、断じて阻止しなくてはならない。サビや『ミュウ』『ミャア』が危機に晒(さらし)されるかもしれないが、抑制力の問題は危惧していない。最年長のタウは国の認可を得た《国定魔術師》――いわゆる国師だ。それ以外にも、あそこにいる遠征メンバーの中には《天翼の騎士団》きっての武闘派、『ソルナ』やトラッタ、『ミン』もいる。大事にはならないだろう。

考えている間に、ヴィオラは丘を登り切り野営地に到着した。

「ヴィオラちゃーーん！」

瞬間だった。タウが大慌てで駆け寄ってきた。

「大変、大変、大変よーー！　早く、早く来て！」

「一体どうした、タウ。まさか……」

タウがここまで乱心している姿など珍しい。ヴィオラの心臓がひくつき、脳裏に嫌な想定が浮かぶ。ヴィオラはタウに導かれるまま、足早に駆ける。視界に、立ち並ぶ団員達が見える。

皆が呆然としたように前を向いたまま動かない。頬を汗が伝う。ヴィオラは焦燥を露わに彼女達の元へ辿り着くと、その前へと飛び出した。

「何があった！」

「あ、ヴィオラさぁん！　お帰りなさぁい！」

ヴィオラの視界に、レイガスと共に角材の上に腰かけ、楽しそうに野菜の皮を剝いているサビが映った。

「……な」

驚くべきは、その光景だけではない。

一瞬、ここはどこだ？　と思ってしまった。

立ち並ぶように地面に打ち付けられた木製の杭群。その間に通された紐に、洗濯物の山が干されている。風に揺られる整然とした洗濯物の波は、圧巻の光景だ。しかも、全て皺までキッチリと伸ばされている。

足の踏み場も無いほど物で埋め尽くされていた地面が、今はハッキリと見える。建築材は離れた場所に積まれ、木箱や樽も綺麗に並べられ、工具や武器もその中にキッチリ収納されている。大まかな分別がされているため、一目でどこに何があるかわかる。

そして、炉の上の大鍋の中からは、食欲を誘う香ばしいにおいが漂ってきていた。

完璧だった。



「これをすべて……お前達で終わらせたのか？」

「……ああ」

「ち、違います！」

驚嘆するヴィオラに応えるレイガス。その刹那、サビがぶんぶんと腕を振るいながら懸命に否定してきた。溢れんばかりの笑顔を湛え。

「ぜんぶ、ぜんぶ、レイガスさんのおかげです！」

■□■□■□

「すごいんです！　掃除も、洗濯も、片付けも、整頓も、全部レイガスさんの言う通りにやったらいつもの半分以下の時間で終わっちゃったんですよ！」

果ても無く漆黒に染まった世界を、満天の星空が彩る。時は夜。

大鍋が置かれた焚き火を囲み、《天翼の騎士団》第二駐屯所建設予定地遠征メンバー達は、サビの作る夕飯の完成を待っていた。

大鍋の中のスープを掻き混ぜつつ、逐一味見をしては調味料や素材で味を調えていく。料理は、サビにとって最も得意な作業であり、最も好きな仕事だ。

そして、お玉を手にした手を振るいながら、彼女は周囲のメンバー達に興奮したように力説

を重ねていく。

「こーーーんないっぱいの洗濯ものも、じゃばーーって洗って、スパーーンって干して！　掃除も一気にばばばばばばばばばばばっ……ピカーーって！」

「わかった、わかったから、サビ。少し落ち着け」

ヴィオラに言われ、サビは恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。笑う団員達。こんなにはしゃいでいる彼女は珍しいのだ。

「……って言っても、ほとんどレイガスさんがやっちゃって、わたしの方がお手伝いしているような感じだったんですけれど……でも、そのおかげで今日はいつもより腕によりをかけて晩御飯の用意ができたんです！」

「よかったわねー、サビちゃん」

手と手を合わせて頬に当て、を無くし、タウが言うと、えへへと、サビは顔を綻ばせる。

「サビがいそがしくってごはん作ってくれなかったから、さびしかったんだ」

「サビのごはんおいしいからねー」

「ねー」

手にした料理を綺麗に平らげ、双子のミュウとミャアが言う。頭頂部から一対の可愛らしい耳を立たせた、半狐の亜人だ。ちなみに、目が青い方がミュウで赤い方がミャアである。

双子の言葉に、サビは涙を浮かべて嬉し泣きした。



「ふぇぇ～ん、ありがとう～」

温かい団欒が彼女達の空気を包む。

さて、そんな風景から少し離れ、レイガスは丸太に腰掛けて芋の皮を剝いていた。翌朝の下準備だ。

「……」

手にした包丁を動かさず、芋の方を回転させて皮を剝いでいく。皮は頭頂から尻まで綺麗な一本の帯となり、足元の木桶の中に落ちる。最後に刃元で芽を抉り、完成だ。

「几帳面な上に、手先が器用なんだな」

一人の女がレイガスへと話しかけてきた。ざっと芝草を踏んだのは、曲線美の映える健脚。半馬の亜人、トラッタだ。

「……それなりにな」

「正直、オークに緻密な作業なんて無理だと思ってたよ」

さばさばとしたハスキーボイスには、先刻のような険悪なものはない。むしろ好意的な感情が伝わってくる。レイガスは、続いての芋に手を伸ばしながら言う。

「どうって事ねぇ。俺が生まれて一番最初に〝オヤジ〟から教えられた事だ。嫌でも身についている」

「オヤジ？」と、トラッタ。「お父様？」と、タウも声を発した。

「ああ……オヤジの〝仕事場〟や〝家〟の掃除だ。少しでも手抜きがあったら殺される」
「随分と厳しいオヤジさんなんだな」
トラッタは表情を強張らせる。対し、レイガスは。
「いや、普通の事だ」
むしろ、どこか懐かし気でもあるかのように語る。
「オヤジが言ってた事は、今でも覚えてる。『俺達はクズに生まれ、クズになっちまった。これから先、望んでも得られないものは多くあるし、今持ってるものも多く失っていく』……」
レイガスは瞑目する。〝オヤジ〟の姿を思い出しているのかもしれない。
「『けどな、クズだが礼儀だけは忘れるな。礼儀のねぇヤツは、知識がねぇヤツよりも金がねぇヤツよりも惨めだ』……ってな」
しぃん……、と場が静まりかえる。誰が発したのかはわからないが、ほー……という吐息も聞こえた。ぱちぱちと薪が燃える音が一段とうるさく響く。
「なぁ、明日はこっちも手伝ってくれないか」
そこで、口を開いたのはトラッタだった。皆の視線が彼女に向けられる。レイガスも、彼女を見上げる。
「新駐屯所の建設作業だ。そのための男手、だろ？　団長」
「ん、あ、ああ」



「えっ！　レイガスさんはわたしのお手伝いさんじゃなかったんですか？」
瞬間、サビがヴィオラへと振り向く。その眼は涙目で、心の底から信じられないといった心情が窺える。そんなサビに、レイガスは溜息を一つ吐くと、希望を与える言葉を告げた。
「……心配するな、必要ならまた助けに行く」
「ぜったい、ぜったいですよー！」
ぶんぶんと腕を振るいながらサビが言うと、他の皆の顔にも笑みが浮かんだ。
ただ一人、ヴィオラを除いて。
「あらら、人気が出始めちゃったね」
いつの間にか、闇に紛れるように背後に立っていたイーヴィが、そう楽しそうに囁いた。
ヴィオラは眉間に皺を寄せ、レイガスを睨み続けていた。

# 幕間1 ―― 〝三条の鬼〟

孤児だった。
自分がどこで生まれたのかもわからない。母親の顔など覚えていない。
名前も無い。戸籍も無い。気が付けば、人間ではなく野良犬としてこの世に居た。
野良犬として、野良犬なりに、生きるために必要な事をして、生きてきた。
何のために生きているのかもわからず、何を支えに生きなくてはならないのかも見出せず、汚泥と生ゴミと孤独の中で十年近く生きてきた。
そんな自分を拾ったのは、三条光利という老年の男だった。
半ば無理矢理に、男の家へと連れていかれた。男は他の多くの男達を従えており、自分もその内の一人となった。
男は時には厳しく、時には優しく、空白だった自分に、様々な物を与えてくれた。
食事を、寝床を、仕事を、礼節を、安心を、〝父親〟と言う名の存在を。
野良犬だった自分を、人間にしてくれた。



そして、14歳の誕生日。
『ほれ、お前の名前だ』
渡された戸籍謄本。そこに書かれた名前は、〝鬼瀬龍平〟。
『せっかくヤクザなんだからよ、強そうな名前を選んできたぜ』
嬉々として語るオヤジに、自分は。
『ありがとうございます』
これ以上も無い感謝の意を込めて、宣言した。
『必ずや、いただいたモノに恥じない人間になってみせます』
『……くっくっ、言うじゃねぇか』
オヤジは、楽しそうに笑った。
『だったら、この業界の恐怖の象徴に…… 〝鬼〟になってもらうぜ、龍平』

■□■□■□

『やめろ』
路地裏。人通りから離れた、薄暗い袋小路。
スーツ姿の、いかにも堅気ではない面の男達が三人、ぼろぼろになった少年を囲んで立って

いた。まだ10代も半ば頃と見られる少年の顔は、打撲傷と腫れで酷い有様となっている。三人の男は荒吐組というヤクザの構成員で、ひょんな事で少年に因縁をつけ、リンチを決行したのだ。

そして、そんな彼等は、路地の入り口から聞こえた声に反応し、目を向けた。逆光の中に、一人の男が立っている。白い背広を纏い、開襟された青いワイシャツの下から屈強な胸板を見せつけている。身長は2m近く、体格も相応にでかい。見た目だけで、その備えられた膂力の量が伝わってくるようだった。極めつけはその顔。まだ若い――20代前半くらいだと思える面貌は、彫の深い銀幕男優のような男前だ。しかし、幾度にも亘り修羅場を潜り抜けてきたような威圧感を感じさせる。

『テメェには関係ねぇだろ』

荒吐組員の一人が、そう低い声で言う。彼等とてメンツを商売道具とするヤクザの端くれだ。いかなる相手だろうと簡単には引き下がらない。

しかし、続いて男の放った言葉に、三人組の一人が息を呑んだ。

『ここは三条の土地だ。ここで起こった揉め事は、全て俺達三条が仕切る』

『テメェ、まさか……鬼瀬龍平か』

鬼瀬龍平――と呼ばれた男は首筋を掻く。そのうなじに、うっすらと彫物の一端が見える。噂が本当なら、あれが、〝背中に背負った巨大な鬼の入れ墨〟だ……と、三人組の一人、兄貴

分の男は唾を飲み込んだ。
『アニキ、鬼瀬って……』
『〝三条の鬼〟っつう、超武闘派のヤクザだ。お前らだって聞いたことくらいあんだろ』
その兄貴分の狼狽に、他の二人も表情を乱す。
『血も涙も無い、鬼のように恐ろしい男……昔、三条の組長の命を取ろうとした英団組の鉄砲玉がいただろ。拳銃持ったそいつを単身拳だけで叩き潰したのが、鬼瀬龍平だ。腹に二発と肩に一発、左頬にも一発、弾丸食らっても倒れず立ち向かってぶっ飛ばしたらしい』
その言葉に、二人の舎弟が驚愕しながら男――鬼瀬を見る。逆光で黒く染まった全体像の中で、その鋭い眼光だけが力強く三人に向けられている。
『ちっ……行くぞ、お前ら』
言うが早いか、三人のチンピラは尻尾を巻いて消え去った。鬼瀬は、放置されたままの少年に近付き、しゃがむ。
『……立てるか？』
少年は、『うっ』と唸りながら体勢を直す。全身ボロボロだが、骨までは折られていないようだ。鬼瀬は内ポケットから一枚の紙切れを取り出す。病院と医者の名前が書かれた名刺だった。
『ここの町医者に行け。俺の名前を出せば、喧嘩の傷でも診てくれる』



『すい……ません』
少年はコンクリの壁に背を預け、苦しそうに言った。
『あの……ヤクザ、ですよね？』
鬼瀬は答えない。黙って、少年の顔を見ている。
『その……俺を、ヤクザにしてくれませんか？』
『……お前、親は』
『居ません……ガキの頃捨てられました。俺には、他に行き場も無いんです』
息も絶え絶えだが、目には光がある。何も無かった人間が、人生の道標を見つけたような、そんな光が。
『お願いです。雑用でも何でもやります。だから――』
瞬間、鬼瀬は必死で請う少年の頭を掴み、後ろの壁に叩き付けた。衝撃に唸り声を漏らす少年の目に、怒気を孕んだ鬼瀬の顔が映る。
『……小僧、舐めてんのか』
『な、舐めてません！　俺は――』
『いいか……〝ヤクザになる〟って事はな、〝人間のクズになる〟って事なんだよ』
鬼瀬の眼圧に、少年はたまらず言葉を飲み込む。
『俺達はな、自分より弱い奴を踏み付けて食い物にするクズだ。お前が何をもって言ってんの

かは知らねぇが、よく聞け。ヤクザっつうのは、真面目にコツコツ地道に努力して頑張って生きてる人間から金を毟り取る仕事だ。世間の汚さも醜さも辛さも知らない無知な中学生や高校生を騙し、女なら体と心を襤褸切れになるまで売らせて金を作らせる仕事だ。貧乏にめげず親のために欲しいものも我慢して、「将来はパパとママに楽をさせてあげるんだ」と、そんな無垢な子供をその親の手で殺させる仕事だ』

『……ッ』

『才能も覚悟も根性もいらねぇ。この業界にいるのは、何の罪悪感も無くげらげら笑ってテメェの粗チンおっ勃てながら、そんな事ができる奴だけだ』

一息にそれだけ言い切って、鬼瀬は立ち上がり、少年に背を向ける。

『消えろ。二度と面を見せるな』

負傷と畏怖から、声を発する事も立ち上がる事も出来ない少年は、そんな鬼瀬の姿を黙って見送るしかなかった。そして鬼瀬自身も、それ以上彼に関わろうとは思わなかった。どんな理由があろうとも、こんな業界に足を突っ込んで幸せになれるはずがない。それは、彼なりの優しさだった。

――しかし、翌朝。少年は鬼瀬の前に再び現れた。



三条の屋敷で朝支度をしていた鬼瀬に、三条が声をかけたのだ。「門の前に野良犬が一匹いるぜ。どこで拾ってきたんだ?」と。

見に行けば、屋敷の門前に少年が昨日の姿のまま立っていた。

『お前……』

『俺、世間知らずなんで、無礼なのもわかってます……でも』

顔を顰める鬼瀬を、少年は真っ直ぐに見る。

『俺は、ヤクザになりたいんじゃない。あんたみたいになりたいんです』

『……ちっ』

鬼瀬は溜息を吐く。そして、振り返り、そこに立つ三条を見る。

『オヤジ……』

『躾はちゃんとしろよ、お前が責任もってな』

苦笑する三条に一礼すると、鬼瀬は再び少年に向き直った。

『小僧、名前は』

『燕です』

『……燕、まずは屋敷と事務所の掃除からだ。そこからキッチリ覚えろ』

■□■□■□

『まったく……俺は〝鬼になれ〟っつったのによ』
軒先を箒で掃く燕と、その動作に口出しをする鬼瀬。二人の姿を屋敷の中から見ながら、三条は舌打ちする。しかし、どこか顔は嬉しそうだ。
『いいじゃない、常に鬼で居続けなくたって』
そこで、三条の背後に少女が立つ。艶やかな黒の長髪に、気の強そうな釣り目が特徴的な中学生くらいの少女だ。
『紫』
三条光利の一人娘、三条紫は桃色の唇を微かに持ち上げた。
『あいつは、立派な人間なんだから』

**試し読み版はここまで！**
**続きはGA文庫「そのオーク、前世（もと）ヤクザにて」でお楽しみ下さい！**
**7月15日頃発売！**